

台東育英

VOL. 19

台東区立台東育英小学校

No. 8

校長 瀬下 清

<http://www.taitocity.net/taitouikuei-s/>

大人の度量

副校長 原 之雄

私は幼少のころ、とても落ち着きがなく、よく道端で転んでは擦り傷をつくっていました。小学校に入学してからは、文字をノートのマス目の中に収められず、枠外にはみ出して書いていた記憶があります。困った母親は、集中力と落ち着きを身に付けさせようと、私を近所の友達と共に書道教室に連れて行きました。1年生の秋ごろだったと記憶しています。

初めて筆でひらがなを書いた時のことです。友達は半紙の中に字をきちんと収めているのに、私ときたら墨を大量につけ、力を入れ過ぎるため、極端に太い字になり、半紙は破けてしまいます。何度やってもその繰り返し。これは絶対に叱られると思いつつ、書家でもあるその教室一番の先生にそれを持っていきました。字を一瞥した先生は、信じられない言葉を口にしました。「これは素晴らしい。」そして、その日に書いた習字全てに大きな丸をくれたのです。

破けても、はみ出してもいいんだ・・・私は何だかうれしくなって、それから毎週教室に通うようになりました。先生は毎回大きな丸を付けてくれます。私はうれしくて、添削が終わってからも傍で先生の一举手一投足を見るようになりました。大きな硯で墨を磨る様子、とても難しい草書の手本を書く様子、全てが流れるようで面白く、じっと見入っていました。数年後、一緒に入った友達よりも何故か遥かに上達し、賞を取るようになりました。

私は後年、「あまりにも不器用で下手過ぎる少年を勇気づけるための教育的配慮に見事にのったのだな」と気づき、先生に感謝しました。しかし今は、事はそう単純ではないと思っています。小学校一年生の子供に必要なことは、半紙に細い整った字を書くことではなく、墨汁をたっぷり付けた筆で太い字を、たとえ半紙からはみ出してしまっても、半紙が破れてしまっても伸び伸びと書くことだと先生が思われていたからではないか。

子供の中に大人を見出そうとしない。子供は小さな大人ではなく、その年代ごとに特有の世界観をもっている。そしてそれを経験し、自らクリアしていく(獲得していく)ことがその後の成長にとって非常に大切な意味をもつ。これが「エミール」の骨子で、いわゆる「発達段階」の考え方のもとになっているものです。先生はこのことを深い経験から直観されていたのかもしれませんが。

最近こんな話を聞きました。中学受験対策の塾には頻繁にテストがあって、これをもとにクラス分けをするそうです。これをシステムと割り切って活用するやり方はあると思います。残念なのは、この点数やクラス分けを子供自身が自分あるいは他者を評価する尺度としてしまい、必要以上の優越感をもったり、劣等感をもったりするケースがあることです。人間の資質・能力のごく一部でしかない学力の、そのまたごく限られた部分を切り取ったテストの点数で人や自分を測る脆弱さ、塾(世間)の物差しで自分や他者を判断する主体性の脆弱さ、これがたまたま残念なのです。

私の考える、小学校段階で子供が経験し、獲得していくべき事柄は、「自己肯定感」です。自分で決め自分で行動する主体性、その結果うまくいっても、うまくいなくても、それもまた自分と受け入れる自信、人との違いを違いとして受け止める自信、これら全てが自己肯定感です。自己肯定感の高い子供は、他者を受容する力もぐんぐん伸び、寛容で器の大きな人へと育っていきます。

子供の中に大人を見出さない・・・私たち大人の度量が試されているのかもしれませんが。